

---

# もしも明日が滅びていたら

落鮎 雁

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

もしも明日が滅びていたら

### 【Zマーク】

Z5945B

### 【作者名】

落鮎 雁

### 【あらすじ】

私たちは若い。私たちは自分勝手だ。私たちはお互にそう違ひはない——だからこそ、何かが起こせるはずだ。

(前書き)

戦争描写が少しあります。苦手な方はお控え下さい。

死んだと思っていたから、目が覚めたことはひどく意外だった。

重くのしかかっているものが何かは最初は分からなかつた。息苦しかつたので、地を手で搔き足で蹴り、しばらくそうしていと這い出ることができた。

腰が痛むのを堪えて立ち上ると、

見回すまでもなく景色が

聞くまでもなく音が

嗅ぐまでもなく匂いが

全てが向こうから感覚器に飛び込んできた。

地平線まで気持ち良く見渡せる焼け野原、散らばった銃に軍帽に軍靴、まだらに折り重なつた二色の軍服姿、黒や肌色や赤迷つたように半端に吹いたり止んだりする熱い風、遠く飛ぶ戦闘機の尻窄まりなエンジン

焦げた苦い匂い、灰の乾いた苦い匂い、血のすえた匂い

振り返らずとも分かる。俺が下敷きになっていたのも、仲間だか敵の兵隊だかの身体が重なつたものだろつ。

見ているのも聞いているのも感じているのも、

俺だけのようだ。

そう思つたのと、早くも視界の中で動くものを見つけた。  
条件反射のように腰からピストルを抜いた。長銃は何処かへ吹き  
飛んでしまったのか、手元に無かつた。

ビデオを見せられているよう。

そいつは仲間だか敵だかの身体が折り重なつた下から這い出てきて  
辺りの様相にしばし茫然として  
すぐに俺に気付き、腰のピストルを抜いた。  
違うのは軍服の色だけだった。

可笑しくて

思わず銃を取り落として笑ってしまった。

声を上げて腹を抱えての大笑いは、ここ数年無かつたことで  
涙まで出ってきた。

「何人撃つた?」

「五人ぐらい」

「俺三人」

「なんだ、俺らの貢献つてそんなもんか」

「だったら居なくても良かつたなあ」

「だなあ」

軍服が折り重なった上に腰掛けて、俺達はしばらくのんびりと語り合つた。俺は下手な英語と身ぶり手振りで。あいつは訛つているけど俺に合わせて、簡単な英語だけで話してくれた。  
なぜだろう、今上から爆弾が落ちてきたりしてこいつと一緒に死んでも悔いは無いな、と思つた。

「何でお前笑つたの」

「だつてお前、俺とそつくりだつたもん」

「そうか?」

「顔とかじや無いけじせ、死体の下から出てきて、ちょっととの間ぽけつとして、相手見つけて銃構えたから」

「真似してんじやねえよ」

「はあ?違つし...」

今度は一緒に笑つた。

「あながち同じだよな」

「うん、考へてることとか

「行動パターンとか」

「個性とか言つてたけどさ、結局みんな特に代わり映えしないよな」

「生意氣だつたよな、俺達」

「生意氣だつた。大人より立派でえらいつて思つてた  
ほんとは大人つですげーよな」

「爆弾も銃も戦車も、造つたの大人だもんな」

「兵隊動かしてんのも」

「国動かしてんのも」

「俺らじや絶対無理だもんな」

「世界の国も覚えられなかつたもんな」

「だからこんなことしか出来ないんだな」

「大人はよく分かつてるよな」

「すげーな」

世界共通の言語つて素敵だ。ちょっと知つてるだけでこんなに話せる。

「でも、何で俺を撃たなかつたの?」

「大笑いしてて気持ち悪かつた」

「ひつでーな」

「ウソウソ。だつて撃つ理由が無かつたから」

「そつか……みんな死んでたもんな」

「でも、それまでに顔合わせてたらたぶん撃つた」

「だろうな。事実俺以外は撃つたもんな」

「なんでだろ」

「そうだな、なんでだらうな」

なんで俺達は殺し合つたのか。

「ガキの頃で、ストライキとか言ひて仲間で授業をぼったことあつたんだ」

「ああ、やるよな、あの頃ぐらこの俺ら」

「そんなんふつて、こんなこともストライキとか言ひてもぼらなかつたのは」

「なんでだろな」

そうしてれば、今俺の下で死んでいる奴は死なかつたかもしない。

この戦いの障害にもなれたかもしぬのに。

「そうしたらどうなつたと思つ」

「大人は手を打つだろうな」

「俺達、きっとひどい仕打ちを受けたんだろうな」

「家族、殺されたりしたのかな」

「拷問受けたりしたのかな」

「それって、ここで殺し合つよつひどいことなのかな」

「わからんね」

「結局、俺達はさ、」

「うん」

「田先のことしか考えなかつたし、」

「うん」

「自分のことしか、考えないし、」

「うん」

じつして戦争は終わらない

「俺達、どうなるんだろうな」

「わかんねえよ」

「わかんねえよな」

「でも、やっぱり、帰りたいよな」

「帰りたい」

「故郷くわいご、まだ残ってるかな」

「……」

「……」

しばらく、赤茶けた空を見上げた。  
熱い風の音を聞いた。

あの空が青くなる日が来ても、俺達は変わらず自分のことに精一杯になりながら生きるんだわ。」

それでも。

二人で焼け野原を歩いて、一本道に出た。  
平野を貫く道は両側の地平線へ続いている。

「じゃあ、俺、」  
「うだかー

「うだな

最後、一人で向かい合つた。考え方も動き方も、鏡のよひこそつ  
くりな、そう珍しくないお互いを。

「もし、故郷が無くなつてたら、どうする？」  
少し考える。

「…もしかしたらこの調子で、どこまでも行つても焼け野原かもな」  
少し笑う。

「そうだよな。もう世界全体が滅びてるかもしねいよな」  
「有り得るよな」

「もし、そんなことになつてたらわ…」  
「なに？」

もしも、明日が滅びていたら。

「また、ここに戻つてこないか？」

「俺も、同じこと考えてた」

ああ、俺はこんな優しい顔で笑えているんだろ？

「ずっと待つてるからさ」

「滅びてたらの話な」

「忘れるなよ」

出会つたことを  
生きてたことを  
殺したこと  
を話したこと

俺達がどういう生き物なのか

立派でもえらくもないけれど  
ストライキぐらーの規模でも、何か起らせることがあります

だから、もしも明日が滅びいたら、一人でここへ戻つてこう

じゃあな

この長い一本道の先にある現実を  
とりあえず、確かにいくんだ

それが俺達が初めて自分の意志でする、自分だけのためじゃない  
こと。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5945b/>

---

もしも明日が滅びていたら

2011年1月12日22時21分発行